日本陶磁器全書

418
25

始

418
25

418-25

日本陶磁器全書

大正
6. 7. 23
内交

日本陶磁器全書第一巻目次

顧問　藤谷榮尾徴

一　圖版部

第一圖版　仁清作　月に紅梅色繪茶壺
第二圖版　仁清作　涙に三日色繪茶碗
第三圖版　乾山作　桔梗繪茶碗
第四圖版　同　上　高臺及絲切
第五圖版　同　上　梅繪茶碗
第六圖版　同　上　高臺及絲切
第七圖版　木米作　黄交趾寫波に蜻洲紋急須
第八圖版　同　上　蓋
第九圖版　木米作　草花浮紋色繪煎茶々碗
第十圖版　同　上　底面
第十一圖版　御室焼　梅竹梅色繪三重菓子器
第十二圖版　保全作　仁清寫日の出に薄繪茶碗
第十三圖版　具次郎作　赤茶碗　銘玄翁
第十四圖版　同　上　高臺及絲切
第十五圖版　同　上　箱　書
第十六圖版　同　上　添狀
第十七圖版　ノンカウ作　梯子繪蠟茶碗
第十八圖版　同　上　高臺及絲切
第十九圖版　同　上　箱　書

二　書史部

增訂大成陶誌　幾内之部

JAPANESE POTTERY & PORCELAIN

Volume 1

Edited and published by

The Japan Pottery & Porcelain Society

CONTENTS.

All plates selected by Mr. E. Fujiya, Adviser of the Society, from the Collections of the Tokyo Imperial Museum.

Plate Nos.

1—Tea-Caddy by Nonomura Ninsei.
2—Tea-cup by Nonomura Ninsei.
3 & 4—Tea-cup by Ogata Kenzan.
5 & 6—Tea-cup by Ogata Kenzan.
7 & 8—Tea-pot by Awoki Mokubei.
9 & 10—Tea-cups by Awoki Mokubei.
11—A nest of boxes, Omuro ware.
12—Tea-cup by Eiraku Hozen (Yasutake.)
13-16—Tea-cup by Chojiro.
17-19—Tea-cup by Nonko.

Japanese Pages

Taisei Toshi (A history of Japanese pottery and porcelian).

例言

一、本書第一卷は、本會顧問藤谷榮尾氏に請ひて、東京帝室博物館藏品中、殊に京都諸窯に屬する代表的名作を撰定掲載せり、これ本卷に收めたる大成陶誌と、幾分の連絡を圖らんが爲めなり。

一、圖版は本卷に限り、着色版となすことを得ざりき、これ全然撮影品を移搬するの便宜を缺けるを以てなり。蓋し天然色寫眞機は、安定基礎の上に、完全なる寫場を有するに非ざれば撮影する能はざればなり。卷を遂ひて彩畫を加ふるに努むべし。

一、圖版は其一二を除くの外總て原寸大に撮影したり。

一、說明は本會編纂部員の記すところにして、窯傳其他は皆大成陶誌に讓り、簡單なる英文解說を加へて外人會員の便に供せり。

一、東京帝室博物館が其寶什の撮影を特許せられたるを感謝すると共に、多年同館に在りて陶磁器に主任たる藤谷顧問が、繁忙の時を割きて、本書の爲めに圖版を撰定せられたる好意を特記して感謝の意を表す。

六正六年七月

(Plate No. 1.)

Tea-Caddy by *Nomomuro Ninsei.*

(Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Ninsei was born in Tamba province and came up to Kyoto in 1615-23, where he studied the art under Sôhaku, a master ceramist. After completely mastering the ceramic art, he built kilns at several places around Kyoto, such as *Awataguchi*, Omuro, mizoro, Seikwanji, etc.

The tea-caddy is one of the chef-d'œuvre of Ninsei and represents a plum tree in very rich colours.

H. 12 in., D. 10½in.

(Plate No. 1.)

茶入　野々村仁清作

東京帝國博物館所藏

仁清は丹波の國に生まれ、元和の頃京都に出でゝ、狩野探幽に畫を學び、其後諸國の窯を巡りて、遂に京都に窯を築き、其技益々進歩して、遂に陶器の大家となれり。

此茶入は、其二を例に取れば、梅の枝を彩畫したるものにして、其色彩の美なること、實に言ふべからざるものあり。

露光量違いの為重複撮影

第一圖版

仁清作　月に紅梅色繪茶壺

東京帝室博物館藏

仁清の作品は茶器を主として其他皿鉢の類が多い。この茶壺は彼れが遺品中でも傑出したもの〻一つである。一株の紅梅は枝を張つて、朱の色うつくしい花を一ぱいに散らしてゐる、鄙り映ゆる金を砂子の縁に使つて置ところ〻〻に枝をかくして棚引く。白い地紋を疎して、梅が香匂ふ繊な心地よく味ひ得る。月は銀の燒けた様な淡い黒色で、丁度壺の眞うしろ、上部の目に近いところに描かれてゐるが、此圖では見る事が出来ない。

上から下へ、下から上へ、壺のふくらみゆく弧線が、いかにも豐かである。底部には小判形に仁清の二字が押してある、五彩の色のあざけさや、其技巧の精緻なことなどは、云ふまでもないことである。

高さ壹尺壹尺、ふくらみの徑九寸、口の徑三寸二分、底面の徑三寸七分。

(Plate No. 1.)

Tea-Caddy *by Nonomura Ninsei.*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Ninsei was born in Tamba province and came up to Kyoto in 1615-23, where he studied the art under Sôhaku, a master ceramist. After completely mastering the ceramic art, he built his kilns at several places around Kyoto, such as Awataguchi, Omuro, mizoro, Seikwanji, etc.

The tea-caddy is one of the *chefs-d'oeuvre* of Ninsei and represents a plum tree in very rich colours.

H. 12 in., D. 10⅞in.

露光量違いの為重複撮影

第一圖版

仁清作　月に紅梅色繪茶壺

東京帝室博物館藏

仁清の作品は茶器を主として其他器物の物が多いが、茶壺は彼れが遺品中でも傑出したものの一つである。梅の紅梅は枝を張つて、朱の色もうつくしい花を一杯に開らしてゐる、輝り映ゆる金を砂子の樣に伴つて露ところ〴〵に枝をかくして棚引く。白い地釉を喰して、梅が香匂ふ艶な心地よく味ひ得る。月は銀の模げた樣な淡い黑色で、丁度壺の眞うしろ、上部の口に近いところに描かれてゐるが、此圖では見る事が出來ない。

上から下へ、下から上へ、壺のふくらみゆく孤線が、いかにも豐かである。底部には小判形に仁清の二字が押してある、五彩の色のあざけうや、且技巧の精巧なことなどは、云ふまでもないことである。

高さ壹尺壹尺、ふくらみの徑九寸、口の徑三寸二分、底面の徑三寸七分。

(Plate No. 1.)

Tea-Caddy *by Nonomura Ninsei*

Collection of the Tokyo Imperial Museum

Ninsei was born in Tamba province and came up to Kyoto in 1615-23, where he studied the art under Schaku, a master ceramist. After completely mastering the ceramic art, he built his kilns at several places around Kyoto, such as Awataguchi, Omuro, Mizoro, Seikwanji, etc.

The tea-caddy is one of the *chefs-d'oeuvre* of Ninsei and represents a plum tree in very rich colours.

H. 12 in., D. 10⅞ in.

第二圖版

仁清作　浪に三日月色繪茶碗

東京帝室博物館藏

二寸程の半徑で描かれた圓な、殊更にすこし狹いて、形そのものから淸らかな月夜な思はせる、乳白色の釉ぢ無雜作に横さまに刷毛目な立てゝゐるうちに、幾げた朱の樣な色の新月が藍の雄波絲の雄波のうちから、鎌の樣な鋭い顏な出してゐる。これも仁淸の他の遺作の樣に豐かなふくらみな具つて茶な嗜る兩の手に云ひ知れぬ快感な覺えさせるものである。

高さ三寸二分、徑四寸二分、缺けたる面の中心より外緣まで三寸八分、高臺前後に小さき半圓な切りて左右に分ける。

(Plate No. 2)

Tea-Cup *by Nonomura Ninsei*

Collection of the Tokyo Imperial Museum

Representing the new moon and waves. Grazed in white enamel.

H. $3\frac{13}{16}$ in., D. 5 in.

第三圖版

乾山作　桔梗繪茶碗

東京帝室博物館藏

見の光琳に匹敵たる筆つかひを以つて、巧に秋野の桔梗を、灰白色の地釉の上に寫した手際は、乾山でなければ出來ぬ仕事と頷かれる。

土質の硬堅なのと、一種粗し雅い纖のあるのは、彼れが遺作中の逸品と稱すべきもので、後に掲ぐる梅繪の茶碗と共に、型式的遺作と稱すべきである。

徑三寸三分、高さ二寸五分。

第四圖版

同　高臺及絲切部分圖

高臺の徑は一寸五分、巧に輕快なかひを見せてゐる。

(Plate No. 3)

Tea-Cup *by Ogata Kenzan (1663-1743)*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Kengan, a younger brother of Ogata Korin, a most eccentric genius among Japanese artists. He was living at Narutaki village, western suburb of Kyoto, and produced sundry articles by following Ninsei's style, and also Dutch process.

Later in his life, he removed to Yedo and built a kiln at Iriya.

The tea-cup glazed in white enamel and the design represents a kind of flat bell (*Platycodon grandiflorum.*)

H. 3 in., D. 4 in.

(Plate No. 4.)

DITTO.

The plate showing the base of the cup.

D. of base., $1\frac{3}{4}$ in.

第五圖版

乾山作　梅繪茶碗

東京帝室博物館藏

鶴の桔梗繪の茶碗とひとしく、光琳風の筆によるみない放體さを以つて、白梅清く薫するの情趣を現はしてゐる。地釉は黄の勝つた乳白色、口徑三寸六分、高さ二寸三分。桔梗繪のそれと並べて、すこしく高く、すこしく小いさい、彼れは野に咲く花である、これは清香霜に傲る慨があられねばならぬ。乾山が彼れに低く大きなるを撰み、これに高く小いさきを撰んだのも自づからなる約束に基づいたのではあるまいか。土質の堅く、風韻の掬すべきに於いて、桔梗繪と共に双璧と稱さねばならぬ。

第六圖版

同　高臺及絲切部分圖

高臺の徑一寸四分、乾山の書き銘を見る。

(Plate No. 5.)

Tea-Cup *by Ogata Kenzan.*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

The Cup is also one of Kenzan's typical examples. The design shows a plum-tree in the style of Korin's painting. Glazed in cream-coloured enamel.

H. $2\frac{3}{4}$ in., D. $4\frac{7}{8}$ in.

(Plate No. 5.)

DITTO.

The plate shows the base of the cup.

D. of base, $1\frac{1}{16}$ in.

露光量違いの為重複撮影

第七圖版

木米作　黄交趾寫浪に鯉浮紋急須

東京帝室博物館藏

高さ三寸二分、懷の徑三寸、中心に對して柄と口とは約九十度の角度なし、橫斷面に於て口は約四十五度、柄はなほすこしく急に約三十五度の角なりてゐる。

全體に釉を被ふて、一見交趾の見まがふのである。黄の中央鯉魚と蓋のつまみと、七寶のあるなどは、素地なる目なつたり、手際は驚くべきものである。細に、蓋し強い土と技巧の切れ味、行き渡つたる觀なり、急須に見られるのである。

第八圖版　同　上部

蓋の模樣、中心に對する柄と口との角度などは、この圖によつて知られやうと思ふ。蓋の裏面に小さい小判形に墨書で木米と記した印を押してある。

寫浪の描り方は、すこぶる思ふところがあつて急須の奥を寫した。

(Plale No. 7.)

Tea-pot *by Awoki Mokubei.(1767-1833)*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Mokubei studied under Eisen, a ceramist at Kyoto, and afterward built his own kiln at Awata, in the beginning of *Bunsei* period(1818-29.) But his works were not equal to those of the Awata school, showing somewhat different.

The tea-pot is one of his noted works. Modelled by following on Cochin China ware. The design showing a carf in the waves with yellow glaze in low undercut relief.

H. 3¾ in., D. 3¾ in.

(Plate No. 8.)

DITTO.

The plate showing the mouth of the tea-pot.

露光量違いの為重複撮影

第七圖版

木米作　黄交趾寫浪に鯉浮紋急須

東京帝室博物館蔵

高さ三寸二分、懷の徑三寸、中心に對して柄の角度なし。橫斷面に於ては約九十度の角度なし。柄はほぼ約四十五度、口は約四十五度、柄になほすこしく急に約三十五度の角なり。黄釉が被ふて、一見交趾みたい。全體に黄釉が被ふて、一見交趾みたい。中央の鯉魚と蓋のつまみと、七寶のつまみとは、目なざに素地を喰い上げる。細に、巧に、強い上質と、行き渡つたる。切な技と、急須、蓋、柄、他の諸作に見られぬ。寫實の掘り方に、すこし思ふところがあつて急須の爽なる寫した。

第八圖版

同　上部

蓋の樓、中心に對する柄と口との角度なし。橫樓、中心に對する柄と口との角度なし。この圖によつて知らるゝやうに、蓋の裏面に小さい、小刻形、星形で木米さしの印が用ひてある。

(Plate No. 7.)

Tea-pot *by Awoki Mokubei.(1767-1833)*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Mokubei studied under Eisen, a ceramist in Kyoto, and afterward built his own kiln at Awata, in the beginning of *Bunsei* period(1818-29.) But his works were not equal to those of the Awata school, showing somewhat different.

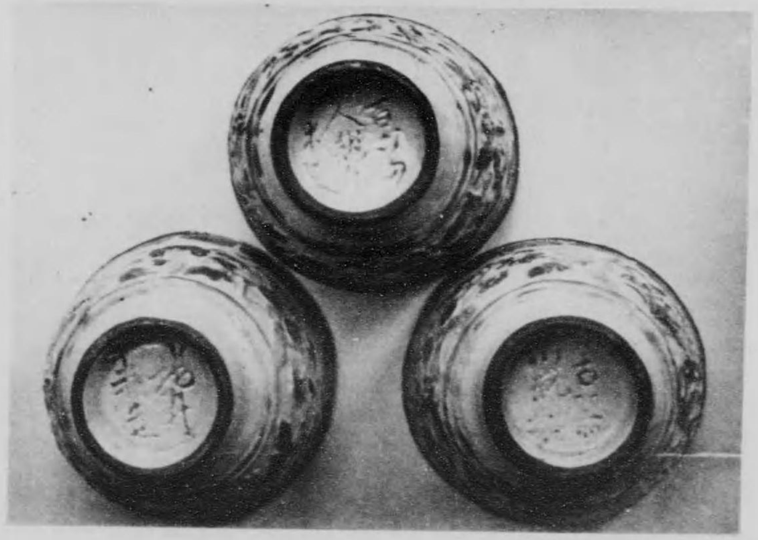
The tea-pot is one of his noted works. Modelled by following on Cochin China ware. The design showing a surf in the waves with yellow glaze in low undercut relief.

H. 3⅞ in., D. 3¼ in.

(Plate No. 8.)

DITTO.

The plate showing the mouth of the tea-pot



第九圖版

木米作　草花浮紋色繪煎茶々碗

東京帝室博物館藏

木米が頴川の門に學んだ頃から、彼れの目標は仁清や乾山であつた、それから遠く祥瑞を學んで、遂に支那明彩の流りものにまで及んだのである。

此煎茶々碗は素地に浮彫樣として草花を出し、五彩色あざやかに着色したところが、いかにも彼れが流りものの研究の所產と思はる。

得はいづれも二寸一分、高さ一寸七分、高臺の高さ四分尺度に五分廻の相違はあるが、其外輪の彎曲してある度は五つとも揃つて、各々柔らかな風分な味はひうある。

第十圖版

同　高臺及絲切部分圖

寫眞は株式會社撮した圖を撮つた。「古器圖製」百六山人「雙米造」また「雙米造」等の彫り銘がよく見える。

(Plate No. 9.)

Tea-cups *by Aioki Mokubei.*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

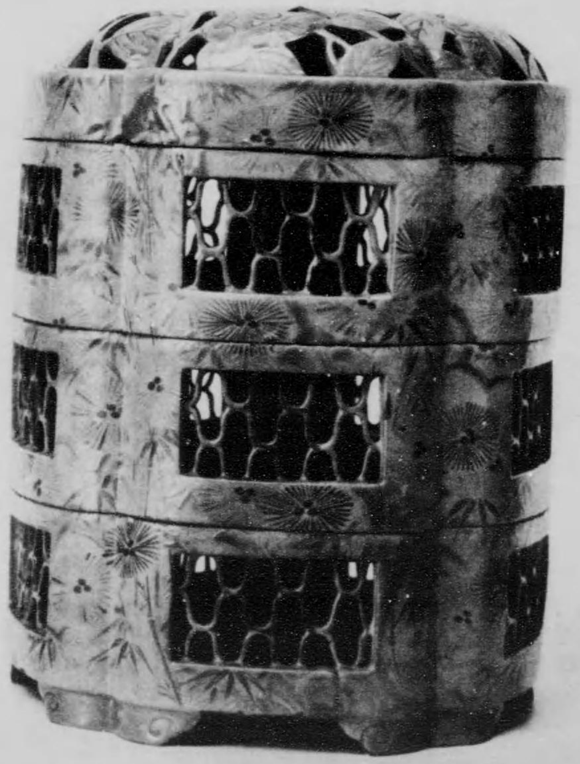
The tea-cups designed with various flowers in coloured enamel. Probably copied from old Chinese ware.

H. $2\frac{1}{16}$ in., D. $2\frac{1}{2}$ in., each.

(Plate No. 10.)

DITTO.

On the base of each cup is engraved the name of Mokubei in different styles. The plate shows the bases.



第十一圖版

御室燒　松竹梅色繪三重菓子器

東京帝室博物館藏

明白の地肌に細かい特徴を漂はせ、藍と綠と金とを巧に交錯してたゝ一面の松竹梅を描いてある。併し此作の技巧は、寧ろ、比較的素朴な多角形を作つて、其各の邊に網狀の透き彫をし、蓋にも同じ透き模樣の縁の花を用ひて、素地の强堅に伴ふ旋刻を飽くまでも鬼して、精緻な細工を上體に働かした點である。

蓋をひらくと、梅松竹の模樣が順に、三重とも底部にあざやかな藍色で描かれて、各の內壁には落付いた金泥が輝いてゐる。總高さ八寸六分、徑約六寸三分。美くしく輝かしいうちに高い氣品ち味ふことが出來る。

(Plate No. 11.)

A Nest of Boxes, *Omuro ware.*

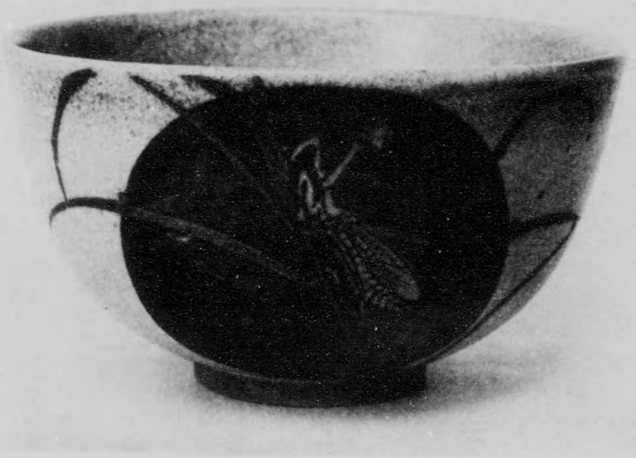
Collection of the Tokyo Imperial Museum.

The Omuro kiln was founded by Ninsei in the early part of the 17th century.

The cabinet is one of the typical example of the ware. The open-works is finished very fine and designed with pine-tree, plum tree and bamboo in colours of blue, green and gold.

H. 10¼ in., D. 7½ in.

露光量違いの為重複撮影



第十二圖版

保全作　仁清寫日の出に蒔繪茶碗

東京帝室博物館藏

保全の作品を思ふ時は、いつでも透き通る様な美くしさと、つやゝかな輝きとが眼に浮ぶ。

此茶碗は白釉に細微な罅裂を見せて、仁清寫なることを容易に頷かせると共に、強い朱の色さびた日の出に、あざやかな金色の海、淡い綠色の螳螂を描いてある。

仁清寫といふ約束を伴つただけに、保全のまりヤナリヤイは覆はれてゐる筈であるが、此茶碗に於ける彼れが妙技は精さもすると仁清の壘を越えやうとして見る、彼れが遺品中の偉なるものと云はねばならぬ。

徑四寸一分、高さ二寸三分。

(Plate No. 12.)

Tea-cup *by Eiraku Yasutake.* (*b. 1793*)

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Yasutake or Hozen is the 11th descendant of the Eiraku family, who manufactured kettles for boiling tea for the first time.

The cup glazed in white cracked enamel by following on Ninsei's style and the design represents rising sun and mantis in rich colour.

H. $2\frac{3}{4}$ in., D. $4\frac{15}{16}$ in.

露光量違いの為重複撮影

第十二圖版

保全作　仁清寫日の出に蒔繪茶碗

東京帝室博物館藏

保全の作品を思ふ時は、いつでも透き通る様な美しさと、つや〳〵かな輝きとが眼に浮ぶ。

此茶碗は白地に細微な罅裂を見せて、仁清寫なる古雅な容姿に頷かせると共に、強い朱の色きびはだに、あざやかな金色の溝、淡い緑色の螳螂を描いてゐる。

仁清寫といふ約束を伴つただけに、保全のヨーザイは復はれてゐる筈であるが、此茶碗に於ける彼が妙技は稍ともすると仁清の藝を越えやうとに見る、彼れが遺品中の傑なるものとは言ひ難なるべし。

徑四寸一分、高さ二寸三分

(Plate No. 12.)

Tea cup *by Eiraku Yasutake. (b. 1793)*

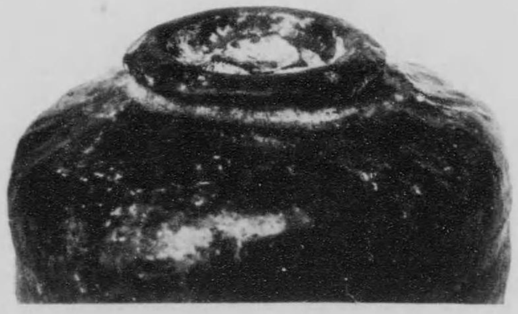
Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Yasutake or Hozen is the 11th descendant of the Eiraku family, who manufactured kettles for boiling tea for the first time.

The cup glazed in white cracked enamel by following on Ninsei's style and the design represents rising sun and mantis in rich colour.

H. $2\frac{3}{4}$ in., D. $4\frac{5}{10}$ in.

露光量違いの為重複撮影



第十三圖版

長次郎作　名物赤茶碗　銘女翁

東京帝室博物館藏

何となくどつしりとした重みのある茶碗である、褐色に白黄色の瑕點なダッヂした一角に半月の樣な膠黑色の斑がある。

徑三寸五分、高さ二寸七分。

第十四圖版

同　高臺及絲切

高臺の徑一寸七分。

(Plate No. 13.)

Tea-cup *by Chojiro.* (*d. 1592*)

Collection of the Tokyo Imp rial Mus um.

Chojiro is the son of a nationalized Korean ceramist. He started to produce *raku* ware at Kyoto. Favoured at first with the patronage of Sen-no Rikyu, one of celebrated masters of the time, he afterward removed to the Juraku palace by order of Taiko Hideyoshi, where he continued his works.

The cup is one of his *Chefs-d'oeuvre* and is praised by circles of connoisseurs as "Meibutsu" or famous articles.

H. 3¼ in., D. $4\frac{3}{16}$ in.

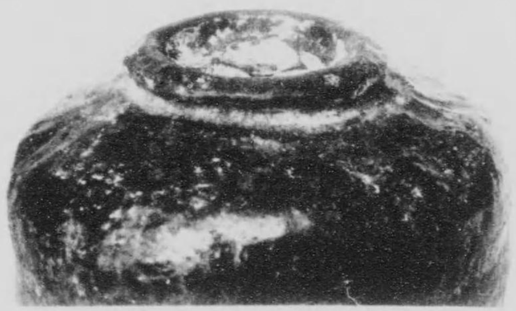
(Plate No. 14)

DITTO.

Th› plate shows the base of the cup.

D. of base, 2 in.

露光量違いの為重複撮影



第十三圖版

長次郎作　名物赤茶碗　東京帝室博物館藏

何となくどつしりとした重みのある、褐色に白黄色の斑點なども一面にある基調である。

半月の樣な腰黑色の瑕があり、

徑三寸五分、高さ二寸七分

第十四圖版

同　高臺及絲切

高臺の徑一寸七分

(Plate No. 13.

Tea-cup *by Chojiro. (d. 1592)*

Collection of the Tokyo Imperial Museum.

Chojiro is the son of a nationalized Korean ceramist. He started to produce *raku* ware at Kyoto. Favoured at first with the patronage of Sen-no Rikyu, one of celebrated masters of the time, he afterward removed to the Juraku palace by order of Taiko Hideyoshi, where he continued his works.

The cup is one of his *Chefs-d'oeuvres* and is praised by circles of connoisseurs as "Meibutsu" or famous articles.

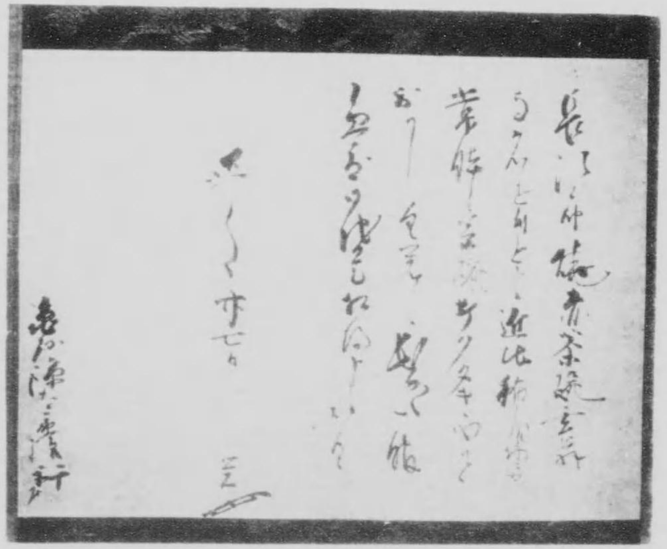
H. 3$\frac{1}{4}$ in., D. 4$\frac{3}{16}$ in.

(Plate No. 14.

DITTO.

The plate shows the base of the cup.

D. of base, 2 in.



第十五圖版　同　箱　書

箱書は玄案と銘した宗左の筆である。

第十六圖版　同　添　狀

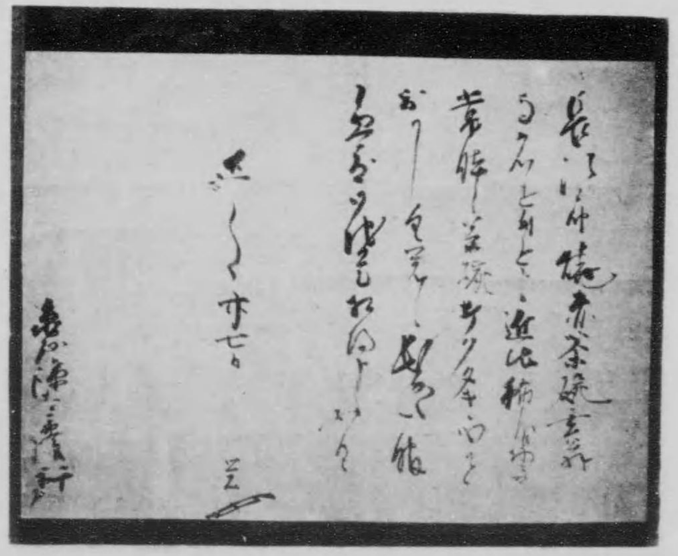
添狀は箱書を清して返す時の口上である。「茶碗の茶碗打くだき候心」が面白い。

(Plate Nos: 15 & 16.

DITTO).

Writings about the judgement of its genuineness by Sen-no Sosa, a connoisseur and Cha-no-yu master at the beginning of the Tokugawa period.

露光量違いの為重複撮影



第十五圖版
同　箱　書
箱書は玄蕃と銘した宗左の筆である。

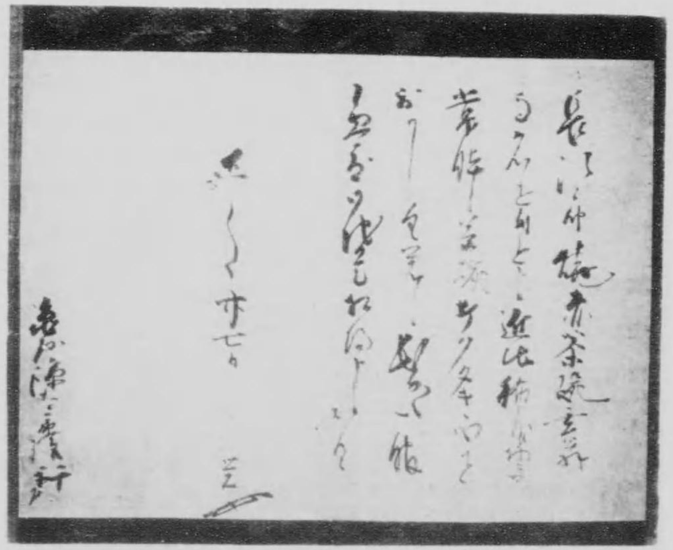
第十六圖版
同　添　狀
添狀は箱書を讃して送す時の口上である。「雲體の茶碗打くだき候心」が面白い。

(Plate Nos: 15 & 16.)

DITTO.

Writings about the judgement of its genuineness by Sen-no Sosa, a connoisseur and Cha-no-yu master at the beginning of the Tokugawa period.

露光量違いの為重複撮影



第十五圖版　同　箱　書

箱書は玄翁と銘した宗左の筆である。

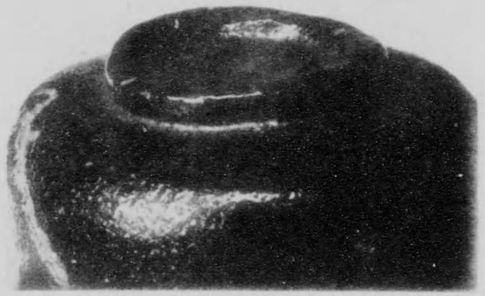
第十六圖版　同　添　狀

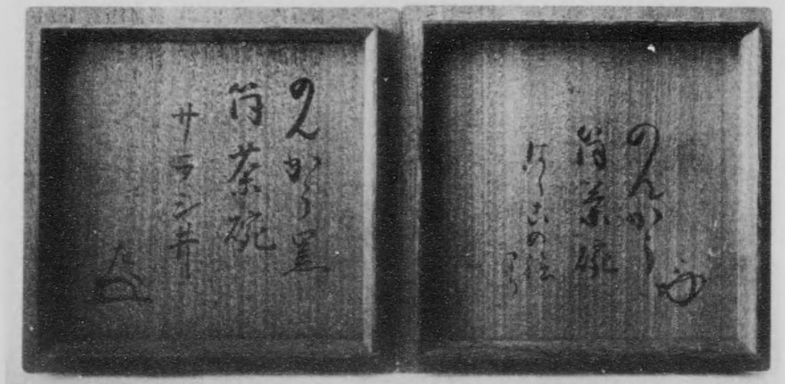
添狀は箱書を證して返す時の目上である。「茶體の茶碗打くだき候心」が面白い。

(Plate Nos: 15 & 16.)

DITTO.

Writings about the judgement of its genuineness by Sen-no Sosa, a connoisseur and Cha-no-yu master at the beginning of the Tokugawa period.





第十七圖版

ノンカウ作　梯子繪黑茶碗　東京帝室博物館藏

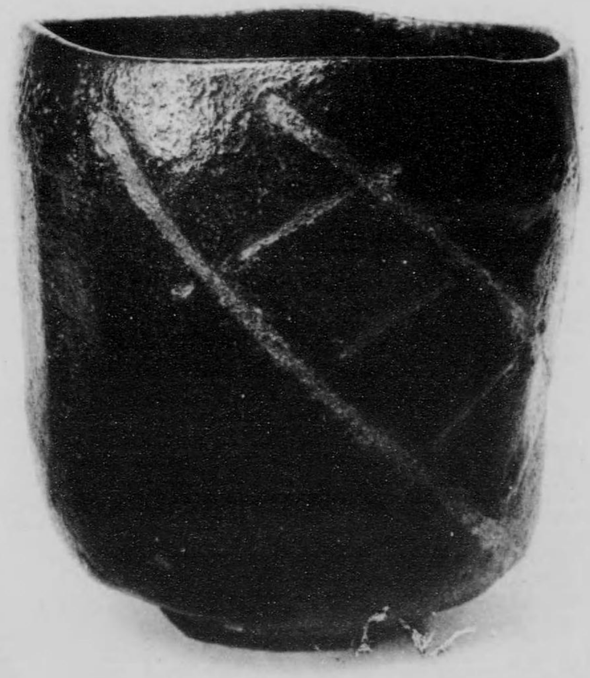
漆の樣に黑い。ところ〳〵に氣泡がある。高さ四寸の筒形に、錆に梯子を彫つた。豪壯な氣分が滿ちてゐる。反對の側に小いさい桐唐草の圖がある。

(Plate No. 17.)

Tea-cup *by Nonko. (d. 1656)*

Collection of the Tokyo Imparial Museum.

Nonko or Dōnyū is a grandson of Chojiro. Showed strong originality.



第十八圖版

同　高臺及絲切

高臺の徑一寸八分。

第十九圖版

同　箱　書

宗鉉の筆である。

(Plate No. 18.)

DITTO.

The plate showing the base of the Cup.

(Plate No. 19.)

DITTO.

The writings on the covers of the box keeping the cup, relating the judgement of its genuineness, by Sosa, a connoisseur of the tune.

大成陶誌

解題

大成陶誌は山高信離氏の稿本と稱せられ、全十卷本邦諸州の窰業に就いて、其窰傳作家、特徴、其他を詳述するに、上古より始めて近代に迨び精細收め盡せるの觀あり。もと原著者が備忘の手記に過ぎざるが如く記事交錯して甚だ讀むに難く、且つ今は帝國圖書館の特別貴重圖書に屬して、他に傳寫の流布を見ることなし。

玆に我が日本陶磁器全書に採輯するに當り、少しく文辭を修め、章句を訂すると共に、異說考證を頭註して、假りに增訂の二字を冠せり、然れども其頭註の如きは、必竟蛇足に終らんことを信じ、愼重校合の事に當りて、妄りに原著冒瀆の罪を購はざらん事を期したり。

大正六年六月

增訂 大成陶誌

幾内

山城國

嵯峨土器

垂仁帝の御宇、齊宮を伊勢國より、山城國葛野郡嵯峨野の宮に勸請ありて、山田の禰宜を差添らる、其子孫藤本佐太夫、椹木權太夫と云ふ、後藤本藤太夫、同甚太夫、同次太夫同忠太夫、同次郎太夫、藤林佐近分家す(時代不詳)、嵯峨小倉山の土を採り祭器を作る、內裏御清所の御器をも作れり、、年間(嘉永五年より七百二十ヶ年斗前)椹木甚太夫近衛家へ願ひいで、同家領地なる、愛宕郡幡枝村の土を採り、製作する事となり、即其地に移住す、百四十五年前、職業衰微して、藤本藤太夫、同甚太夫、二家となる、凡二十ヶ年前まで、土器を製すと雖も、是又休業せり。

幡枝土器

九太夫	藤太夫	與太夫	平太夫
彦太夫	三太夫	庄太夫	孫太夫
五郎太夫	清太夫	權太夫	縫太夫
李太夫	丸太夫	平太夫	

外に平民新五郎外七人

以上二十六軒、此內九太夫は內裏御清所御用を勤め、外禰宜は公家の用

○雍州府志に、北山幡枝土器村人、三度七度並に塞鼻等の器を造る云々、禁裏清所に献す、或深草並に上嵯峨三軒村に於ても亦これを製す云々、

器を作り、平民は單に賣品を作るものとす、且禰宜は元嵯峨小倉山の麓深草の里に住せしが、應仁二年東幡枝村に十八軒斗り移住す、元龜年間木野芝（地名）を賜り、木野村と稱し、又此に移住す、土は幡枝村字庄田に採る。

寒鼻（ゴロヌカ）（土器の名）

大なる炮烙の如きもの、毎年三月内裏にて花の御會の御用器なり。

七度　五度　四度　三度

口徑一寸を一度とす。

大重　小重

大は燈明土器小はへら土器を云ふ。

深草燒

伏見領砂川九丁目、燒鹽屋權兵衛、先年より累代、禁裏並公家へ左の品を調進す。

皺土器　一枚口徑二寸八分斗り

土器　三枚同上

茶器　三枚同上

右三品を一組と唱へ、例年十二月、烏丸某町奥野九十九方へ納む。

土は深草村字筆ヶ坂、同倉ヶ谷に採る。

同家所有古文書

就御尋口上書

一私先祖出生、並に伏見へ來住、土細工燒鹽商賣職方の義年暦左に記し奉差上候。

先祖出生は播州何の郡西方村（但郡名不分明路より十里斗り四の由）右先祖は、其邊奥田村と申す所にて住居仕候、これに仍て、奥田氏又平田氏とも申候。

伏見御城御用に付、先祖義、文祿二癸巳年、播州より伏見田町に罷越住居仕候、年暦今日迄百五十八年に相成申候、慶長年中深草山の内、今の瓦町の地に居所相極り申候、燒鹽並花形鹽、同土細工商賣渡世仕る者、右瓦町に住居の節より不絶仕來り、今年迄凡百三十餘年に相成候。

二代權兵衛、寛永十九年壬午、瓦町より海道筋へ出、當宅に住居仕、今年迄凡百五年に相成申候。

禁裏樣、公方樣、御屠蘇の具、土器細工一式、寛永年中より右御用被仰付、則今大路道三樣へ、是迄御吉例之通、一ヶ年も無滯累代差上來り、今年迄凡百四年に相成申候。

大嘗會御用の義は、往古より相勤來、吉田御家へ累代差上候處、元文三戊午年、禁裏樣にて大嘗會被爲遊御行候節、寛延元戊辰年、禁裏樣にて大嘗會被爲遊御行候節、右兩度とも御堂上藤波樣へ奉差上候。

御即位御用の義も、前々より被爲仰付、先祖より累代不絶相勤來候。

右之通に御座候。

寛延二巳己年

權助組直違橋九町目燒物師權兵衛印

伏見人形

創業不詳

○幸右衛門の土偶は、土型を用ひて人像禽獸等表裏各半面を壓作し窰に入れて後膠にて縫合し、着色を施すなり

雄略天皇の御宇、伏見に於て陶器を製し獻すと云ふ。

元和元年伏見の人、鵤幸右衛門、始て土偶人形を造る、時人呼で人形屋幸右衛門と云ふ、深草里の工人亦之に倣ふ。

大槩抄に、啐啄齊幼年の頃、如心齊伏見稲荷參詣の節、土産に燒物の猿を持參せしよしにて、啐啄齊了々齊の頃は、毎年初午の日に床飾にして茶を喫すとあれば、創業は其以前なる事知るべし。

俳諧歳事記初午の部に、門前に大小の陶器を賣る、其大なるをでんぼうと云ふ、其始攝津傳法の海濱より製し出せり、故に傳法燒と云ふ、其小なる物をツボ〳〵と云ふ、此土器手中に運轉すればツボ〳〵の音あり、故に名とす。

嘉永五年製販するもの二十七軒、所作は眞向布袋、同稲荷、土鈴、一文牛、デンボ、外二種。

伏見街道十町目	松葉屋平七
同通丁一ノ橋下ル町	丹波屋龜助
同二ノ橋上ル町	富士屋忠兵衛
同	紀伊國屋伊助
同田中町	綿屋治兵衛
同	菊屋與兵衛
同	海老屋吉兵衛
同	丹波屋宇兵衛
同稲荷廓中之町	鍋屋嘉兵衛
同	東福寺門前
同	丹波屋龜助
同門前下ル町	紀伊國屋彌兵衛
同阿保町	大黒屋彌兵衛
同下井町	美野屋茂八
伏見黑門下ル極町	丹波屋嘉助
同	龜屋喜助
同	田中屋利兵衛
同	菱屋宇兵衛
同	山城屋利兵衛
同	北國屋八兵衛

○永樂燒　元祖齊五郎より九世宗嚴に至るまで土風爐を作る、十世了全文化十年始めて磁器を作る

○永樂燒　始め足利義勝將軍の大永年間南都西の京に西村宗印あり土器及春日社の神器を作る、茶家珠光紹鷗嘱して土風爐を造らしむ、好尚に投じて奈良風爐の稱あり、宗印永祿元年三月歿、子宗善業を繼ぎ泉州堺に移る、文祿三年十一月歿、三代宗全京都に移り六條東洞院に在りしが、後室町上立賣安樂小路に移り父祖の衣鉢をつぐ、元和九年二月歿、四代宗善、承應二年歿、弟宗全五代、元祿十年歿、六代宗貞、寛保元年歿、七代宗順、延享元年歿、八代宗圓、明和六年歿、九代宗嚴、安永八年歿、代々業を繼ぐ、

○十代了全は宗嚴の子、樂了入に學ぶ、天保十二年正月歿、十一代保全、文化中磁器を創め明和永樂年製のものを模し所謂金襴手を能くす、紀州に聘せられ所謂御庭燒の作あり、陶器は交趾を模し黄紫綠紺白等の釉を用ふ光澤美にして透明なり、磁器は明代古染付金襴

永樂

初代永樂善五郎、本姓は西村、永祿年間の人、奈良に住す、春日社の祭器を作る。

二代　善五郎宗善と號す、文祿三年奈良風呂を製す、泉州堺に移住す。

三代　善五郎宗全と號す、父の業を襲ふ。

四代　善五郎宗雲と號す。

五代　善五郎宗筌と號す、、、上京室町上立賣上ル風呂圖子町に移住す。

六代　善五郎宗員と號す。

七代　善五郎宗順と號す。

八代　善五郎宗圓と號す。

九代　善五郎宗嚴と號す。

十代　善五郎了全と號す、文化年間初めて磁器を作る、紀伊國主德川齊順君の愛顧を受け、河濱支流及び永樂の號を給ひ、併て永樂の印を授かる。

十一代　善五郎保全と號す、天保年間磁器を製す。

同	遠江屋喜兵衛
同	加賀屋清三郎
同	菱屋清次郎
同	割烹屋庄兵衛
同	丹波屋七左衛門
同稲荷中ノ町	糀屋岩吉
同	鍵屋伊兵衛
同	丸屋善兵衛

手なり、偕樂園と印し又手記す、後男山に窯を開く御庭燒よりは劣れり、十二代回全後和全と稱す別號永翁青磁を能くす、晩年大阪に移る、

○了全　古器寫、藍染付、金彌手に妙を得たり

○一本に、文政十亥年十月頃、淀江齊宗左、南紀に參勤す、西濱の殿に謁す、西村保全同じく命を奉して追隨す悉くも柳蔭亭に宿して滯府數旬、竈光日に渥し、殿の庭上新たに竈窯を造り陶を作らしむ、恩顧殊に深く、河濱支流の金印を賜ふ、漫りに押すを許されず、更らに永樂の銀章を賜ふ云々、

○慶應年間加賀大聖寺城主前田飛彈守領内鹽屋村の豪家西村小左衛門に命じて和全等を招き、山代村春日山の麓、陶工清右衛門の許に金襴手を教えしむ、留まること五年にして歸る、

○得全、技前代に劣らず　磁色深赤中微黄を帶ぶ、

○玉水燒は樂窯の分れにて樂四代一入の庶子一元通稱彌兵衛の創むる所、專ら茶器を作る　二代彌兵衛、三代四代共に甚兵衛と稱す、

○光悅　通稱次郎左衛門、自德齋と號す、本阿彌光二の男、刀劍鑑定を業とす、性頗る多能にして本阿彌家三事と稱する刀劍の鑑定、磨礪淨拭に長するのみか、書畫製陶竹木彫刻及び蒔繪を能くす、燒く所茶碗多し、樂燒にて手癖あるもの也、長次郎等に倣ふと雖も其形大きく何れも赤釉にして黑釉を見ず、寛政十四年二月三日卒行年八十一歳光悅寺に葬る、

○光悅名物茶碗、白峰、雪片、毘沙門堂、障子、富士、

○空中、信樂窯をも能くす、

○乾山、光琳の弟、洛西鳴瀧村に住す、乾の山に窯を開き、燒物に乾山と印す、

○京都に於ける乾山の製作は、古粟田若くは仁清の如き土色を帶ぶ

○正德五年五月、崇保院宮公寛法親王、東叡山遷御に從ひて江戸に移り入谷に寓す、此處にての製を世に入谷乾山といふ、隅田川燒に似て釉藥厚し、

○寛保三年六月二日卒八十一歳

○名は惟久、通稱權平又新三郎、尙古、習靜堂、紫翠、靈海、陶隱、深省齋の別號あり、寛文三年京師に生る、父尾形宗謙、洛西鳴瀧に窯を開きて古和蘭燒を模す、

○初期の作は御室粟田燒に近く土質細かく上釉に小さき環珠ありて陶質優し、入谷に於ての作は土質釉ともに軟く品位卑し

○二代乾山　野々村伊八、養父沒後鳴瀧に歸る、其作白樂にて藍模樣のもの多し、

○三代乾山　宮崎富之助

○後柏原天皇の永正年間、朝鮮國の人、飴爺歸化して京に住し、陶製に從ふ、後佐々木氏を姓とす、天正二年卒、壽八十二歳、宗慶と謚す、

十二代　善五郎和全と號す、文政六年生る、家業を繼く、慶應三年、三藤ケ治郎等の招に應じ、加州山代村に赴き、五年間挺埴に從事すと云ふ。

十三代　善五郎得全と號す。

十四代　善五郎、下京區第二十二組鷺尾町に住し、父祖の業を襲ふ。

玉水甚兵衛　時代不詳、大阪一心寺什物に、利休形茶盌三千六種寫と云ものあり、箱書付目錄とも自筆にして各其名を記す。

妙喜閑居　止々軒作　書付かくの如し。

本阿彌光悅　鷹峰窯、ノンコ窯、瀨戸窯、萩窯、加賀窯、右所々へ形を遣し燒かしむ、自作は樂燒なり。

空中　光悅男、法眼に叙す光甫と云ふ、自ら陶器を作る、寛永正保年間京師の人。

乾山　尾形氏、名眞省、尙志と號す、別號紫翠又乾山と云ふ、西洋の風を模擬す、極彩色ものゝ内にアマカハ出來の火入フタ置、乾山の名あり、又兄光琳が畫を寫し、乾山の燒きたるなど間々あり、後江戸に遊ひ、入谷の里に住す

樂燒

千利休、朝鮮より來れる飴爺に命し、其子朝二郎に燒しむるに初まる、聚樂の朱土を用ゆ、雍州府志に云ふ、豐臣秀吉公在聚樂城、千利休招朝鮮人之造陶器者、使燒茶盌、利休取朝鮮之朝字、名朝次郎云々、將軍義植公の臺命に依り、本朝に止り佐々木氏の養子になるとも云ふ。高麗人飴爺、文龜の頃歸化し(元龜の誤ならん)京都に住し陶器を作る、宗慶と謚すと云ふ。

唐山の陶工宗慶歸化し、京都上長者町西洞院東へ入る北側に住せりと。

又四辻前亞相藤原公說卿謝田中氏文あり、樂吉左衛門所藏、其文に云く。

陶工田中氏初祖長祐父曰宗慶明人避堯季亂航海來遊有子五人長祐最長呼之田中氏天正十五年太閤豐臣氏築聚樂城公性好茶識邊土應器用試命長祐作飲器形極尖新受味亦殊乃賜樂字金印傳不朽次子常慶受業新刻私印秘藏金印三子道入繼兄業亦改印自一入至宗入左入長入得入了入及當主喜愷相承父業各變樂字體裁以爲已印經星霜凡二百餘年系脈十代算計倍加聲價益高實豐公之賚可謂榮幸矣余致仕養痾固有茶癖日與釜沸相親三隱陋室法先哲之規則不必奇玩玢羞一椀點茶下喉洗觴似服靈丹即入三昧地其出定之時器物觸目評品念起爲凡飲碗有出沒兩端論華蠻之器形頗偉雅受味甚銳吾州之器形多灑落得味尤鈍不銳不鈍而適苦甘味者獨樂燒亦豐公之眼着在此樂工十代傳法一脈竊窺其志向各爲家初代二代素朴近華三代文質彬々妙巧入神四代長祐剛强五代成於寒瘦六代平穩七代八代穩中有峭有潤九代玄妙朗潤精彩髣髴三代十代溫而奇似又造化手期老蒼是余古器評歟異他押印時數等說

祝業止一家名溢天下後代悠久與南山齊壽但評言一人之私言賴勿挂齒

牙　天保三年初秋亞槐藤原公說

○長次郎は宗慶の男、田中氏と改め父の業を繼ぐ　天正十五年豊臣太閤、聚樂城を築く時長次郎を招き城内に居を賜ひて茶器及び屋瓦を燒かしむ、文祿元年九月七日死四十七歳、

○長次郎の作少からず、千利休が指圖にて燒きしものに本朝茶器七種の名物といふものあり、黒釉にして大黒、鉢開、東陽坊、と銘するもの、赤釉にして木守、早船、檢校、臨濟と號するものこれなり

○異本、黒釉を高蒲、東陽坊　母父圖として大黒を加へす

○樂燒は聚樂燒の略なりと茶器名形鑑に見ゆ、

○樂十代旦入書附に、樂燒もの水漏り候節は、米の洗ひ水を兩三日入れおき候はゝ止り申候云々、

○陶器密法草に、赤樂の藥は、水晶玻璃、酸化鉛、火石末、鐵丹、〆調合す、黒樂の藥は、水晶玻璃酸化鉛、火石末、京鼠川石、〆調合す云々、

○宗味　家兄吉左衛門手傳して一生を過す、自製の品賣り申さず、所望の向へ贈る、云々、

○常慶　町住居して表瞑麗樂燒御茶器といふ文字本阿彌光悦が筆也今に其寫を用ふと、

各家の所説異同あり、暫二三の説を擧て後の君子を待つ。

土は聚樂或は御室、東山、岡崎、大佛、圓山に採り製造す、釉は赤、紫石、珪土、酸化銅、酸化鉛、玻璃等を調和して用ゆ、但聚樂の朱土は一入にて盡きたり、

元祖　飴爺　何處の人たるを知らず、姓氏亦未詳、將軍義植公の臺命により、佐々木氏の養子となり、土器を業とす、之れを世に京燒或は今燒と云ふ、京都上長者町西洞院東へ入る北側に住す、宗慶と謚す、其妻某飴爺歿後薙髪して猶業を執る、世に尼燒と云ふ。

第一世　長次郎　長祐と號し父の業を襲ふ、田中千阿彌と交り厚く、千阿彌千利休と改稱するにより田中氏を冒す、豐臣太閤徵して聚樂城に居らしめ、合力米若干を給與し、茶碗及瓦を作らしめ、樂の字を印せしむ、天正五年織田信長の命により、千利休の意匠を用ひ、赤黒釉の茶碗を製す。

千利休、朝次郎を支那に遣はし天目の燒ふりを習はしめたり。

朝次郎、宗易の命を受け、中華に入て陶法を學び、歸朝の後茶碗を製す、宗易悦びて、則歸朝の朝字を取り、朝次郎に改むと云ふ。

弟庄在衛門、宗味と號し境に住すと云ふ。

第二世　吉左衛門　常慶と號す、薙髪して宗味といふ、豐公より名字黄金印及び天下一の稱號、又樂の姓を賜ふ、これより樂姓を世襲す、合力米を返納し、聚樂を出て市中に移居す、御茶碗屋の屋號を賜ふ、印に拜領印と外大印とあり。

○道入明暦二年二月卒、五十八歳、異本吉兵衛、

○陶器樂草に、長祐身まかりし後道入孤子となれり、さるからに左海なる、能好人といふ所にありし初代宗慶の季子、宗味が許に引取りて、常慶が妻なりし尼妙慶に後りさせて、家系を繼がせぬ　さるによりて其村名を呼びなせしより、いつか雅名となりぬノンコウは能好と書くべき事、云々、

○道入七種名物、獅子黒、升黒、千鳥、猶妻、鳳林、若山、鵜、後窯七種名物、檢校、貧僧、大黒、小黒、鉢子、早瓶、小雲雀、

○一入　初左兵衛、後吉兵衛、元祿九年正月歿　年五十七、妻妙入亦製作あり、

○一入の庶子一元、出でゝ玉水窯を起す、

○宗入　初め惣吉、雁金屋三右衛門の男、享保元年九月歿、年五十三、

○左入　初名惣吉、大和屋嘉兵衛男、元文四年九月歿、年五十五、

○長入　元文五年歿、別號蜷齋、年五十七、又寶暦九年とも、又明暦七年とも、

○得入　左入の二男、安永三年歿年三十、印一ッ、

○了入　長入の男、天保五年歿、年七十九、印三ッ、

○旦入　安政元年歿、

第三世　吉左衛門　道入と號す、字してノンコと云ふ、字義共に不詳、名手の聞あり世に稱せらる、千家殘月亭鬼瓦を作る、後燒失すと云ふ印二種あり。

第四世　吉左衛門　一入と號す、技術絶妙、頗る稱せらる、山田蓮花谷梅香寺に寓し製造せし事ありと云ふ。

第五世　吉左衛門　宗入と號す、千宗左の一字を請たるよし、殘月亭の鬼瓦を作る。

第六世　吉左衛門　左入と號す、又宗左の一字を請たるよし。

第七世　吉左衛門　長入と號す。

第八世　吉左衛門　得入、七回忌に妙覺寺にて得入と謚せしよし、然れば號にはあらず。

第九世　吉左衛門　了入と號す、了々齊の一字を請く、二代常慶か二百年法會執行の後は、中印を用ゆ、前作とは天明年製を云ふ、中印を捺たるは寛政年製也。

第十世　吉左衛門　旦入と號す、宗旦の一字を請く、紀州侯隱居より文字を與へられ、、二代目常慶二百五十年法會執行の後、小形の印を用ゆ、尤も求者の望に依りては大印をも用ゆと云ふ、ノンコまでは五ッ五德なれども、今は三ッ五德を用ゆ、素人の慰作に藥を掛け燒きは、印の下に燒之と書す、隷字は紀州侯の隱居西濱御殿より與へられしところと云ふ、年會後の印は汲古齊の字なり、又隷字小形の印は年

○吉左衛門　明治五年家督、

○京窰は天正年間に始る、寛永迄五十余年、其著名なる工人を擧ぐれば、正意、萬右衛門、源十郎、宗伯、茂右衛門、新兵衛、吉兵衛、道味、光存、茶臼屋某、茶染屋某等なり、

會後小形にせしもの、剃髪後の印は紫野玉林院拙叟和尚の字なりと云ふ、千家殘月亭鬼瓦を作る、宗入作の瓦は藏入にす、天保中紀州侯徽に應じ、園中にて大脇差コボシを寫す。

第十一世　吉左衛門　慶入、家督まで用ひたる印は、紫野黄梅院大綱和尚の字也、後用ゆるものは董其昌法帖中より撰ぶところと云ふ。

第十二世　吉左衛門

久樂　通稱彌助　江州坂本比叡辻村北村平兵衛七男、享和二年四月朔日千家に通勤す、文政八年二月二十七日七十八歳にて剃髪、啄元と號す、八十三歳歿す。

二代彌助　天保七年三月十一日、紀州治實卿に招かれ、西濱の園中にて燒物を爲し、久樂の印を與へられしと云ふ。

鶴亭　今宮の銚職なりしが、文化の比、大德寺門前に窰を築き樂燒を爲す、芳春院松月庵宙實和尚に紫字の印文を乞ひ、箱書付をも乞たりと

（其後中絶）弘化元年、又大德寺塔中常樂庵に再建し、洞雲拙叟和尚常樂の印文を與へたり、紫字印と併用し、二三年にして止む、嘉永年間玉林院末寺大阪堀川口般若寺に窰を築きしと云ふ。

沙彌左七　佛師安阿彌の末にして佛師也、京都油小路通七條下ルに住す。文明頃の人、肩黑手即飛鳥川黄藥を發明すと云ふ。

右近　沙彌左七の孫、佛師也、始めて黄藥を燒出す、文明比の人。

新兵衛　三條高倉住、唐物屋、糸割符有來氏、佐々竹庵の弟子と云ふ。浦井氏とも云ふ。窰印　丁　五

光存　中田川善兵衛と通稱す。窰印　Q　又是れは光の字を松葉にくづしたる也

正意　室町四條下ル町に住す、眼科醫師堀氏。

宗伯　武州川越の者也、文祿の比京都に上り、茶入耳付を燒く、茶椀多し、武州にては伯菴と云ふ窰印　○

茂右衛門　窰印　十

吉兵衛　別府氏、文祿年間尾州鳴海窰にても燒くと云ふ、城意庵の條に見ゆ。

源十郎　竹屋、茶器齋、東六條に住す、宗甫に出入す、伏見兩替町裏に窰を築き、園燒と云ふ、信樂土を用ゆ。

萬右衛門　〃　〃　〃

御堂燒　本願寺の僧順齊と云もの燒成す。

彌之助　黄藥を多く寫す、大窰ものと云ふ。

茶臼屋小兵衛　寺町押小路下ル本能寺前に住す、元は堺の船頭と云ふ。

佐々竹庵　新兵衛の師、丸底を燒く、摺子木手と云ふ、文祿比。

浪屋權右衛門　藤浪手と云ふ、ツマミ底、悴八左衛門も燒く。

高野窰　玄伯と云ふ者、橋媛を模造す、雄穆なる人なれば、世人狼と云ふ。

仁清　野村氏、仁和寺村清右衛門の子、清兵衛と云ふ、若年の比、土佐松尾戸村へ預けられ、同所松柏に陶法を學び、歸京して陶を業とす、山城國愛宕郡御菩薩池の土を用ゆるを、御菩薩燒と云ひ、御室山の土を用ゆる

○新兵衛、有平氏、竹庵に學び後瀬戸に下りて茶入を燒く、呂宋の小壺に倣ひて勝るものあり、世に瀬戸新兵衛と云ふ、其信樂に燒くものを信樂新兵衛、備前に於けるを備前新兵衛と云ふ、窰印は瀬戸のみにして、信樂備前のものに見す、

○光存、又江存、水指等に古備前に擬せしもの多し、

○正意は泉州堺の人京都に移り住ひて室町四條下るに住す、利休同時代なり、飴釉にして、頗れ、ほんのりと現はるゝものあり、品格最もよし、

○茂右衛門に兄あり彌之助と云ふ、此人大窰の作者なり、黄釉等を燒す、弟茂右衛門を瀬戸に遣して茶入を燒かしむと、

○萬右工門は遠州同時代の人、石州侯より賜はりし書簡あるにて知るべし、名物落穗の作あり。一代にて絶ゆ、後万右工門燒と稱し柳馬場三條下るにて茶器を賣れるありと、此万工と萬右衛門と同人にあらざるべし、

○御堂燒、御堂坊主又は坊主手といふ、製作古瀬戸に彷彿たり、種々の茶入あり、

○茶臼屋小兵衛、又十兵衛、專ら藤四郎春慶の釉に志す、

○仁清　元丹波の人、壯年の頃土佐國尾戸村に至り、朝鮮の歸化人

を、御室燒と云ふ、清水サンヲ坂西側に窰を築く、今に仁清窰と云ふ、又御室門前竪町にも窰跡あり、仁清在銘の破片出づと云ふ、御室山續鳴瀧村五番谷にも窰跡あり、金森宗和に章印を授かりしと云ふ、或る箱書附に、丹波國住人野々村播摩大椽藤原正廣入道仁清と記したるものあり、又北野天滿宮什物に同銘のものありと云ふ、奈良一乘院に召され園中にて燒し事あり、無銘なり、薩州鹿兒島に招かれ同所にも赴しと云ふ、又明石燒の祖と云ふ。

明和の頃、押小路にて燒たるを、押小路燒と云ふ、別人ならん。

一說、丹波國桑田郡野々村產にして、寛文の比、御菩薩の池邊に茶器を作り、後御室に移り、青蓮院宮より仁の字を拜領して、仁清と名乘しとも云ふ。

槐記御室仁和寺邊に陶工を業とせし清兵衛といふは、金森宗和の物數寄にて取立られたる者と云ふ、仁和寺の清兵衛故、仁清と云ふ、尤仁清の印は宗和の筆と云ふ。

御菩薩燒　時代不詳

朝日燒　正保年間、小堀遠州宇治の工人をして朝日山麓に窰を築くと云ふ、其子權十郎に政尹朝日の二字印を授くと云ふ。

宇治郡眞島村茶盌山に窰跡あり、初め正保年間宇治町に、奥村次郎右衛門又藤作と云ふ者あり陶を業とす。同所產神離宮下の社に、寛永年間藤作か作りたる唐物模造茶入茶盌等ありと云ふ。

佛阿彌なる者に就きて陶法を學び後元和年中、京都に來り、當時清閑寺に在りし陶工宗伯の門に入り尙其業を修む、成業の後、清水、御菩薩、大內山、御室等の各所に轉じ、且つ業を以て仁和寺宮に仕へ　清左衛門と改む、宮賜るに仁字を以てす、由て仁清と稱す、明暦中、三條河原町の陶商壺屋又茶碗屋久兵衛、肥前皿山の人、青山幸右衛門より、伊萬里燒、錦手の秘法を聞き、これを仁清に傳ふ、仁清終に色繪燒附の法を創む、云々、

○陶器類集に、仁和寺村清右衛門の子清兵衛と云へる者、若年の頃土佐國尾戸の正伯に就いて、陶法を學び、京師に歸り御菩薩池の土を取り陶器を造ると云ふ、然れども仁清若年の頃、尾戸の正伯に學ぶと云ふは誤れり、正伯は攝津に住し、慶應年間尾戸に移るとあれば、仁清若年の頃は未だ尾戸には住せざるべし、或は清閑寺の宗伯に就いて陶器の法を學びしと云ふ或は佛阿彌に學びしと云ふ、又九右衛門の弟子なりと云ひ、諸說區々にして確說なし、云々、按するに清閑寺宗伯に就いて學びしこと確實に近し、

○慶長の末年より元和の始に當り今の粟田の地に九左衛門なる陶工あり、其子庄左衛門、助右衛門及徒弟德右衛門等と陶業に從ふ、製作する所、皆草字にて粟の印を捺す、これ粟田燒の濫觴なり、云々

或說云、朝日燒は宗和好にて、朝日の印も宗和の筆なりと。

慶應元年、松林長兵衛再興を思ひ立ち、庭田家に請て、故跡を開鑿起業し、明治十年亡す、孫松林松之助繼業、土は山城國久世郡藁田村に採ると云ふ。

田原燒　山城宇治に窰あり、遠州時代新兵衛作の茶入あり、遠州書付に一筋あたれ新とあり。

雲形燒　紀伊郡伏見瓦町に、平田平右衛門なるもの、文祿二年瓦盞を製するに初り、寛永十九年居を伏見街道直違橋九丁目に移し、累代瓦盞を業とし、、禁裏御用を勤む、今に至るまで九代とす。

周山　城州八幡に燒成す、姓氏時代共不詳。

粟田燒　山城國愛宕郡粟田口三條通蹴揚げ今道町へ、寛永年間、尾張國春日井郡瀨戸村より、三文字屋九右衛門なる者來り、專ら茶器を製す、德川吉宗公命じて茶盌を作らしむ。

靑蓮院記錄中に、今道町に陶工あり、寛永元年尾張國瀨戸と云ふ所より、此粟田の里に來りて住居す、世に粟田燒と云ふは是也、茶人の弄翫する土器、祖母懷藤四郎彫と云ふ品に候、磁器は皆彼が先祖より造り出し有となん、此里にても、茶盌、猪口、鉢、香爐、或は禽獸虫魚偶人の像を造る、巧にして誠に翫ぶべし、將軍家の茶盌なども此家より奉るなり、近頃まで土

○寶暦五年、將軍德川家重の命により、天目茶碗を製す、白地に糸目あるものにして、俗に粟田口燒又は鷹野茶碗と稱す、又墨藥掛銀覆輪御紋附等の品を調進す、云々

を建仁寺の東遊行と云ふ所と、又神明の邊より東岩倉山よりも取しが、今は其地絶えて、元祿十年關東に願しかば、江州野洲郡南櫻村と云ふ所の山を給はり、今其所を以て陶器の土とす、同里に陶工多し、去れども皆九右衛門と云ふ者の嫡流として、皆此家より出たり。

延享二年正月十一日、御境内御茶盌師九右衛門儀、近年身上甚以不勝手に相成、借金等多分有之、家相續成がたく、公儀御用御茶盌株御斷申上、甥伊右衛門と申者へ、御用株相讓り相勤させ度旨、江戸表御茶道頭へ奉願候所、京町奉行御呼出し、段々譯合御吟味の上、何卒家相續の工面も無之哉と御尋有之候に付、段々不如意の譯申上候得ば、何卒拜借金相願候樣、内々御差圖有之趣に候故、願書指出候趣申出る。

粟田陶器、追年粗惡になるを以て、寶暦五乙亥年、九代將軍家重公、粟田口茶盌師を取調られ、青蓮院宮御用陶工錦光山喜兵衛、岩倉山鍛屋吉兵衛へ、同六子年に茶盌燒成せしむ、於此茶盌株此二人となる、元祿十年以來、土を櫻村に採り來るも、道程十里餘、運搬不便なるを以て、寶暦八戊寅年、櫻村土取場を返し、洛東岡崎村にて、地主相對にて料土を買取る事になる。

御召京燒御茶盌と唱ふるもの、大小あり、薄玉子色釉にて薄作なり。

大　口徑凡三寸六七分深凡二寸

小　口徑凡三寸二三分深凡二寸

御好御茶盌と唱ふるもの。

口徑凡二寸深一寸六分

○正保二年、小林德右衛門、屋號鍵屋　粟田夷町に窰を開く、其製作の畫樣錦色歸くの意より錦光山と號す、

○七代宗兵衛書上に、慶長年間、弊家の祖先土燒物を創業す、正保二年粟田窰を築く、元祿六年鍵屋德右衛門土燒を營み、寶暦五年德川將軍家より、御茶碗試燒被仰付調進、翌六年正月將軍家御用拜命錦光山と稱す、云々

○異本、安田喜三郎、初代より十墨繪御紋付と唱ふるもの。

口徑凡三寸六七分深凡二寸

右墨繪の紋三箇付くる靈屋用と云ふ。

御藥天目燒と唱ふるもの、内外共黑高臺の所少しく玉子釉を用ゆ。

大　口徑凡三寸九分深一寸六七分

小　口徑凡三寸四五分深一寸四五分

錦光山　初代は喜兵衛、此地の產、慶長の比より土器を業とす、正保二年粟田燒窰を築く。

一本に小林源右衛門、家號鍵屋、錦光山と號すとあり。

二代　鍵屋と稱す、德右衛門、元祿六癸酉年家督す。

三代　茂兵衛、後喜兵衛と稱す、寶暦五年將軍家より茶盌試製の命を受け六年正月製造の命を受く、錦光山と號す。

四代　喜兵衛、五代　喜兵衛、六代　喜兵衛、

七代　宗兵衛、夙に勵精業を執り、京都府廳の賞を受く、其狀に云く。

下京第廿五組三條白川橋東三丁目夷町

錦光山宗兵衛

其方事近來種々工夫を凝し專ら外國向の陶器製造いたし候より追々諸國へも輸出土地繁榮の一端と相成心得宜敷事に候依之爲褒美金二圓五十錢遣之候事

明治五年壬申正月　京都府

安田喜三郎　初代鍵屋源七、天正十五年粟田燒開業、錦光山と稱す、十三

三代迄の關傳不詳、

○正德元年八月、帶山粟田東町南側に窰を移す、

○二代與兵衛、享保頃始て帶山の印を用ふ、鐵粉製の畫藥を創むといふ。

○瑠璃燒は天明年間、堆朱燒は寛政年間創むと。

代を錦光山久榮、通稱源七、其二男喜三郎、同初太郎、安政五年粟田東小物座町一文字屋喜兵衛所有の窰並家作を買請、十一月開業し、錦光山と號す。

岩倉山　初代不詳、吉兵衛、師屋、寶曆六年錦光山吉兵衛と同じく、將軍家の命を受け、世に其業を襲ふ、近頃絶家す。

帶山　初代高橋藤九郎は帶山と號す、近江佐々木家の遺臣にして、延寶年間粟田東町に移住し、陶業を創む。

二代　與兵衛、享保年間抹茶器を製す。

三代　與兵衛、寶曆二年繼業。

四代　與兵衛、天明年間繼業、寛政年間、瑠璃燒堆朱燒を發見す。

五代　與兵衛、文化年間青磁燒を創め、禁裏御用を拜命す。

六代　與兵衛、天保年間繼業、彩畫を發明し、景文豐彦に交り厚く、此輩の畫きたるもの間々あり。

七代　與兵衛、嘉永年間繼業。

八代　與兵衛、文久年間繼業。

九代　與兵衛、現に業を執る、

曉山　吉兵衛、忠兵衛とあり。

對山　與兵衛、御菩薩の後裔。

○寶山　雲林院文藏、近江信樂の人、天文中御菩薩に移り、土器瓶子の類を造る、弘治三年卒。

○二代安平　永祿十一年卒。三代熊之助、陶仙居士、天正十三年十月卒、四代安兵衛、大佛殿の茶碗を造る、五代安兵衛、慶長十三年卒、六代熊之助、寛永十二年二月卒、七代文造、正保二年粟田口東分木町に窰を移す、萬治十三年卒八代文左衛門、天和三年三月卒、九代安兵衛、十代安平、寶曆二年十二月卒、弟子鍵屋喜兵衛あり、將軍家御茶碗御用を勤む、十一代文藏文化四年四月卒、十二代熊之助、十三代安右衛門、文化十五年正月卒、十四代熊之助、文政二年卒、十五代平兵衛、文政七年卒、十六代熊之助、天保十三年卒、十七代文藏、

○音羽屋宗左衛門、陶仙と號す、京都五條坂音羽川の邊に住す、寛政年間の人、常に土器を製す、享和年間白手燒を創む、

○二代乾亭、宗太郎と稱す、白手燒の急須等に始めて草花等の色繪を附く、明治二年歿、三代乾亭、松之助、性を乾と稱す、

寶山　茶碗屋文藏、文化比。

寶山　茶碗屋忠兵衛。

同　同　安兵衛。

丹山　初代青海は、丹波國熊野郡湊大向村、岸本松三郎三男、文化十年癸酉七月十九日、生年十三、同郡久美濱村の陶工新力山利喜造の養子となる、竹洞豐彦等に從て畫を學ぶ、弘化三年粟田に居をトし、嘉永二年窰を築く、同六年青蓮院宮、陶器局を開かるゝ際此に從事す、明治四年七月、岸本の姓を二男章造に與へ、丹山と改む、明治十九年歿す、章造も亦陶を業とす。

二代　長子芳太郎、元治二年繼業。

三代　丹山陸郎、慶應二年十月業を繼ぐ、明治六年、墺國博覽會事務官に隨行し、彼の地に於て修業す。

清閑寺燒　初代惣左衛門、音羽屋と號す、寛永十八巳年より、城州愛宕郡清閑寺字丸山後茶碗山と云に住し、陶業を創む、九代にして止む、窰を大佛境内丸屋佐兵衛に讓ると云ふ。

初代惣左衛門箱書付に、音羽山燒元祖と記せしと云ふ。

乾亭　音羽屋惣太郎、乾亭と號す、嘉永年間の人なり、音羽屋惣左衛門の子孫にして、一種の泥器を製す、之れを乾亭燒と云ふ、初白泥にして、茶を煎ずれば忽ち黑色を顯し、屢々する後は漆黑の如くになり、金畫彩

○角の中に乾字の銘ある素燒地に極密畫の品往々あり、木地は乾亭の作にて、繪は初代道八の弟周平の描く所なり、云々

○異本、小川久左衛門、最も陶窯築造の術に長す、一條家の御召により相樂郡鹿背山字かくれ谷に窯を開く、永世三人扶持を賜はる、

色畫等燦然とあらはる。

丸屋佐兵衛　大佛境内鐘鑄町に住し、文政二卯年、音羽屋の窯を讓受け此に移る、又弘化四未年、同町丸屋卯兵衛に讓る、此窯は清水五條坂燒物窯元祖として窯元と唱ふ。

名村梅吉　初め寶山文藏に學び、天保年間今道町に創業す、其子久次郎繼業。

三村源兵衛　文化年間寶山文藏に學ふ、子源次郎父と斗り、明治七年東町に開業す。

鹿背山燒

森本助左衛門、文政十年相樂郡鹿背山村宅地近傍に良土を認め、大和國五條坂の職工を使用し、且擧家就業す、今其孫助左衛門繼業す。

小川久右衛門　加賀國能美郡若杉村の人、文政中諸州の窰所に遊び、天保十年大阪天滿源八町樋の口に窰を築き、弘化四年一條家より祿を給はり、其采地なる山城國相樂郡鹿背山の谷に窰を築かしむ明治三年和歌山開物場の招に應し、紀伊國有田郡男山窰に從事し、同十年石川縣に赴き、十一年歸京し、小川鐵之助と相謀て五條坂に開業す、今即小川卯之助繼業、王樹園文齋と號す。

村田要造　相樂郡大河原村田土を以て、明治十三年、伊賀國阿拜郡丸柱村の職工を仕用し、起業す。

○姓淺見、天保十二年二代六兵衛に學び、其歿後三代六兵衛に師事す、五條橋東に住す。

○文久年間仁清の門に入る。

○近江產櫻の產、松山と號す、

○道八は龜山藩士高橋八郎太夫の次男にして、周平光重と稱す、寶暦中粟田に寓し窰を創む、兼て木竹彫刻を能くし、松風亭空中と號す、

○二代道八、文政の末年三代道八と謀りて白磁青華磁を製す、又青瓷及各色の彩料を用ひて釉の上下に深淺のぼかし及拔畫を出す、

○光時紀州侯に召され、園中に窰を設けて、瑠璃窪の香合を作る、安政二年五月病歿、

○二代道八、顯川に學ぶ、天明三年生る、安政二年五月卒、年七十三、

○幼名道三、道翁と號す、明治十二年八月歿、

○四代道八、華中亭と號す、土石を肥前天草及近江信樂に取る、

○明治三十年七月歿、

澤村東左　二代三代六兵衛に學び、嘉永五年五條東四丁目に開業し、自から號して祥瑞五郎助と云。

山本辰之助　中村政五郎より傳習して、元治元年、五條東五丁目に開業し、龍山と號す。

奥村安太郎　明治九年、下京區門脇町に開業し、東山と號す。

安藝美吉　明治八年、清水に開業して、乾山樣の陶器を製す。

高橋道八　初代周平、石川光量、松風亭空中と號す、勢州龜山の藩士、高橋八郎太夫の次男、元文五年に生れ、文化元年四月廿六日卒す、歲六十五、寶暦年間粟田に寓し、陶器を製す。

二代　道八、名は光時、法螺山人と號す、晩年仁阿彌と號す、文化八年五條坂に移住す、天保十三年、伏見桃山に隱居し、桃山燒と稱す、拔畫を製し世に用ひらる。文政九年仁和寺宮より、仁阿の字を給ふ、法橋に叙せらる。

三代　道八、名光英、父仁阿彌に隨ひ、家業に從事し、明治二年鍋島閑窓君の招に依り、有田に赴く、彼地の試燒等あり。

四代　道八、名は光賴、繼業。

藏六　初代、山城國乙訓郡久我村農源兵衛又源左衛門一男又三男田三郎、文政五壬午年十月廿八日生る、天保五甲午年、叔父三代龜亭の門に入り、弘化元年開業、藏六と號す、後妙法院宮の敎諭に依り、眞清水と改姓す、元治元年、

○平吉、尾形周平と謀り、門人熊吉を肥前有田に遣して石磁の秘法を修めしむ、熊吉歸洛の後、舊製を一變す。

○六兵衛當に應挙、呉春等と交遊す、故に其下繪に成れるもの多し。
○茶匠手記に種々古作の寫物あり煎茶具もあり、又茶具は水指、茶碗香合、何れも古器寫なり、又種作もあり、藍繪金繪素燒あり、畫御本寫茶碗水指あり、其頃の畫工應瑞景文の下繪なり、云々、
○異本寛政十二庚申年四月廿四日歿とあり

千宗室、茶を　孝明天皇に奉るの時、茶器を製し、宗缶の號を授く、明治十年六月十六日卒、年五十六、子十太郎繼業、二代壽太郎と稱す、弟を象三郎と云ふ。

龜亭　初代、和氣平吉、龜亭と號す、美濃の人、龜屋卯右衛門に學び、寛延元年五條坂に窯を築き、陶器を製す。
二代　龜亭繼業、文化四卯年歿
三代　龜亭、文政年石燒を成す。
四代　龜亭繼業明治四未年歿
五代　平吉、繼業龜亭と號す。
和氣平兵衛　三代龜亭の男なり、慶應三年五月分家す。

六兵衛　初代六兵衛、愚齊と號す、攝州島上郡東五百住村古藤六左衛門男、幼字栗太郎、寛延年間海老屋清兵衛に學び、明和年間五條坂に創業し、清水六兵衛と稱し、專ら茶器を製す、曾て妙法院宮御園にて、黑樂茶盌を燒成し、御自製六ッ目の印を賜ふ、以後黑樂茶盌に此印を擦す、此他用ゆる所、六角内に清の字、大小二顆を用ゆ、天龍寺桂州和尚、自ら書して授くる所なり、「きよ水」の印は、師清兵衛の授くる所、寛政十一年歿す、享年六十二。
二代　六兵衛、靜齋と號す、愚齊の男、父歿する時、幼少にして暫く廢業す、文化八年開業、晩年青華磁器を燒成す、印は父の印に、外廓一重を加へ用ゆ、萬延元年三月歿、年七十一。
三代　六兵衛祥雲と號す、青齋の男、弘化三年繼業、嘉永六年禁裏御所御附、大久保大隅守、長谷川肥前守、土燒庭燈籠を奉献す、即ち祥雲の造る所、今御園に在りと云ふ、所用の印は、六角の内に清の字、六兵衛の款字は大德寺大綱和尚の授くる所なり、明治十六年六月歿す、年六十二。
四代　六兵衛、祥麟と號す、所用の印は、大德寺牧宗和尚の書にして、六角の内清の字、大中小三顆、並に清六の印あり、又六居と號す、清不の印あり、饒州地土を白不と云ふ、之に倣て清水土を清不と書したるなり。
七兵衛　清水七兵衛と通稱す、二代六兵衛靜齋の子、六兵衛祥雲の實兄なり、越後地方に出稼すと云ふ。
清風　初代與平、梅賓と號す、加賀國金澤保田彌平の男、享和十年生、文政年間京師に至り、三代道八の門に入り、弘化元年五條坂橋東五丁目に開業す、清風と稱す、文久元年卒。
二代　與平、五溪と號す、文久元年業を繼く（弘化二年の出生にして明治十一年卒す）
三代　與平、梅溪と號す、明治十一年繼業、五溪の姪なり、時に漸く八歳、實父清山平橘、業を執り、兼て教育す、清山は播摩國大鹽村、岡田得風の男にして、慶應二年、二代清風の門に入り、業を修む。
幹山　傳七、尾張國春日井郡瀨戸村の人、文久元年清水に開窯し、磁器を專業とす明治の初め圓窯を築く、之を京師に丸窯を築くの始とす。

尾形周平　初代周平は、高橋仁阿彌の弟、稻田氏に招れて淡路に赴き、珉平を助けて開窯す。

二代　周平繼業、一説に大阪順慶町心齋橋筋猪口湯呑の燒附せし文吉と云ふ者なりと。

三代　吉三郎、明治元年淡路に赴き開業し、十年京に歸る。

中村政五郎　五條坂陶工海老屋彌兵衞弟なり、兄弟協力して、元祿年間三寧坂上西側に窯を築き營業す、天明年中清水に分家し、仁清の印を捺し、仁和寺仁清の裔と云ふ。

清兵衞　海老清と云ふ、海老は屋號也、寛延の比清水に茶器を製す、穎川並に六兵衞等の師なり。

穎川　姓氏不詳、大黑町五條南側に住す、專門陶工にあらず、好く陶器を燒成す、海老清に學ぶ、成化磁萬曆赤繪等の模造あり、印なし、赤繪釉を以て號と花押を書す、青華磁器には彫銘のものあり、木米道八龜助嘉助の徒、穎川に學ぶ、曾て享和年間、攝州三田の青磁窯を開くに當り、龜助を派遣す、木米行かんことを乞ふ、穎川許さず、人に語て云ふ、木米は其技倆衆に超ゆ、行かしめば三田の青瓷古器に紛れんと、後果して染付青瓷の精を極む、穎川先見ありしとなり。

木米　姓は青木氏、名は八十八、之れを縮めて木米と稱す、字は佐平、九々鱗と號す、書畫を能す、明和四年生、天保四年歿す、年六十七、遺子あり周吉

○穎川、名は庸德、通稱茂右衞門、陸方山と號す、常に好みて古染付交趾窯、其他支那の古器を模す、文化八年四月二十七日歿、年五十九、

○木米、其先は尾張の人、少壯より儒雅の間に交り、書畫を能くす、中年耳聾す、曾て紀州侯に謁して古器鑑の印を賜ふ、

○木米元は南禪寺の僧にてありしかば、學文に通す、云々、窯は粟田小物座町にあり。

○文政の初め粟田小物座町に窯を開く、土は建仁寺東遊行又は神明東岩倉に採り後江洲野州郡南櫻山村に採る

○父は大田垣傳右衞門、智恩院の廣間侍なり、云々、

と云ふ、八才にして夭す、其姉ヲイ、享年七十餘にして歿す、元陶工に非ず、偶兼葭堂に寓し、朱笠翁の陶說を讀み、始て陶業に志し、穎川に學び、遂に其精を極む、其陶說翻刻して世に公にす。文化四年（或は云文政年中）龜田鶴山の招に應じ、加州金澤春日山に於て製陶に從事し、同五年歸京す。

蓮月尼　因州藩、大田垣某の女、文化年間知音院の邊に住す、三十餘歲にして、父並夫二子に別れ、粟田天王社の邊に隱居し、陶を業とす、製品には必ず自詠和歌を書す、明治八年歿、年八十五歲、安政五年、西加茂神光院境內に在るの日、黑田光良と門師の約を結ぶ、故に光良明治十二年五月、開窯して二代蓮月と稱す。

采石山　百五十年前、采石山と云ふ者あり、能く高麗ものを寫す、采石山の印あり、無印のものは、高麗に見まがへり、姓氏未詳、東京博物館に藏する所は白土にして、紺錠釉盛上げ唐草地釉粟色即粟田燒なり。

龜次郎　初代村田龜次郎、享和元年土器を創製す、二代龜次郎、天保十年父の業を繼ぎ、萬延元年より青華磁器を燒成す、三代金次郎と稱し、龜水と號す、明治九年父の業を繼く。

和泉國

行基燒　窯跡年代不詳。

半田燒　泉州大島郡八田庄東八田村、俗に坪八田村と云ふ、八田を邦俗

ハンダと云ふ、百姓清太夫八田燒の印として、和泉八田長齊とある方印を所持す、角兵衛伊兵衛市郎兵衛和右衛門幸兵衛灰炮烙を燒くなり、土は ウンゲン坊に採る 喜永 比永

又喫茶餘錄に云く、底取炮烙、天下一玄載、二代玄載、泉州木田村に細工人あり、云々、利休時代と云ふ。天下一長齊印額緣あり、泉州八田の住、紹鷗時代人、炮烙を燒く。

湊燒

天正年間茶器を作る。

延寶年間、上田吉左衛門雜器を製す。

大島郡湊村に、上田吉左衛門、慶安年間、京洛北御室村より移住して土器を製す。一說には延寶年間とあり。五代吉左衛門、文政中初めて樂燒を製す（一名御室燒）其後其家滅す、同村津鹽吉兵衛業を繼く、今其子孫吉太郎營業す。

菱古燒

泉州堺吾妻橋通菱古山と號し、支那風の陶器を作る、初め安政三年安村淺次郎創業、其後安村數馬又吉田正平繼業す、安村善十郎創業以來之を管理す、今自身營業す。

初め大阪西區江戸堀の住、樋口平兵衛屋號菱屋十四世の陶商にして、別號菱古と云ふ、初め大和五條村窯に於て、支那風の陶器を作らしめ、菱古の印を捺す、後安村善十郎に托して製す、亦菱古の印を用ふ。原土は阿部野其他の土を混用し、攝州生瀨の土、染料の藍澱を中釉とし、天草石を表釉とす。

攝津國

古曾燒

能因法師肥後國古曾部より來り住す、法師の慰作を初とす、法師歿して中絕す、元和の比良工あり、此に燒成す、遠州七窯の內にして、宗甫授くる所の印、行書古曾部の印あり、後世又楷書の印あり、寬政三年四月、五十嵐信平、島上郡古曾部村に再興す、歿後二世信平業を繼ぎ、明治十五年十月歿、子信平業を繼く、第三世とす、辰砂燒を爲す、信樂島上郡眞上村の土を併用す。

同郡眞上村慈願寺村の土を用ふ、天草信樂土を釉となす。

高原燒

大阪小橋にて燒く、茶碗高麗に似たり。

高津燒又難波燒

大阪高津にて、承應の比黑谷土を用ひて燒成す、土は鼠淺黃、釉は淺黃黑青色染付もあり、牡丹葡萄等作り物あり難波の長方印あり。

承應年間、大阪高津の人、久野正伯、國主の招に應じて土佐國に下り、尾戸

にて燒成すと云ふ。

紫藤良助　明治初年より、難波本町一丁目に開窰す、久山と號す、眞砂燒を發明す、土は阿部野茶臼山邊に採る、石は天草を用ゆ。

三田燒

神田宗兵衛義重は、攝州川邊郡中筋村、小池氏、幼字は九十郎、明和五年三月十三日生、天明元年日州有馬郡三田村神田氏の養子となり、後父の名を襲ふ、寛政元年、領主九鬼侯に乞ひ、三輪村字狗ヶ奥に窰を築き、地石は青野村に採り、京都よりは龜助、肥前よりは太一郎定二郎を招きて起業す、享和元年家僕紫石を弄ぶを見、取て試みるに青磁料なり、遂に此石を同郡香下村字砥川に得て青磁器を製す、(先に京都に招きしは別人か、或は先には肥前の工人耳にして、此時に初めて京工龜助を招たるか、頴川の條見合すべし)文政の初め、同郡大原村字虫尾新田に窰を築き、相並て製造す、同十一年笹山侯の召に應じ、丹波に青磁窰を開くと云ふ、天保九年十月廿日歿す、子左衛門家業を繼ぐ、天保年間、同所向井喜太夫業を繼ぎ、嘉永六未年廢業せり、安政七年二月、同所田中利右衛門再興し、同郡三輪村の人内田久吉を雇ひ、之れに從事す

志手原燒

有馬郡志手原村の人、小西金兵衛、寶暦明和の間に窰を開き、世に業を繼ぐ、今の戸主を藤兵衛と云ふ、弟常吉も亦陶を業とす、原土は居村に、釉料は同郡中野村に採る。

甲村又七　明治十四年、西洋窰を神戸に築き、紀州燒の如き、淡青色釉の陶器を製す、後普通の登り窰に改む、原土は淡路由良浦に採る。

陶器社　三田藩士集合、明治十二年四月、三田屋敷町に一社を興し、陶業に從事するものなり、元土を淡路由良に採る。

櫻井燒　島上郡櫻井村の人、初代清水寛造、尾形周平に學び、天明二年開業す、二代太左衛門、三代太十郎、繼業す。

吉向

攝州西成郡小島古堤新田村(一名十三村)陶工治兵衛、伊豫國大洲上灘土器職帶屋武兵衛男與左衛門召連、享和比十三村に移住し開窰す、代官岸本武太夫、或日號を尋るに未定なりと云ふ、武太夫行未吉に向ふと云ふ意にて、吉向と名付しと云ふ、天保の末、信州善光寺在に住し、其後江戸向島に住す、松齊又十三軒と號す、松平確堂君、早稲田の邸にて燒成す、河濱支流の景式印は確堂君賜ふ所と云ふ。

増訂

大成陶誌　畿内終

418
36

日本陶磁器全書第一卷
（不許複製）會員外非賣

大正六年七月十九日印刷
大正六年七月廿日發行

發行兼編輯者　東京市芝區芝公園十一號地　日本陶磁器協會　上川邦基

印刷者　東京市京橋區八官町十九番地　山口七郎

印刷所　右同所　忠愛社

寫眞撮影　藤本清吉
玻璃版印刷　林米太郎
木版彫刻製本　堀越貫一
　　眞柄吉

日本陶磁器協會
綱領及規則摘要

【綱領】本會は藝術的見地を以て本邦陶磁器を世界に紹介し其進歩發展を圖らんが爲め代表的古名作及びこに關する文獻を研究し以て實際的智識を普及するに努む。

【事業】日本陶磁器全書を編纂して會員に限りこを配布す【會期】壹ヶ年【會費】壹ヶ月金貳圓五拾錢【全書】毎月一回發行十二卷【入會】何時にても差支なし。

終